農民オケ 夢舞台

デンマークで初の海外公演

▲ 重厚な調べを響かせた北海道農民管弦楽団＝13日、シルケボー市（西山由佳子撮影）

【シルケボー（デンマーク）西山由佳子】道内の農家らでつくる北海道農民管弦楽団（牧野時夫代表）は13日、デンマークのユトランド半島中部シルケボー市で初の海外公演を行った。

代表「気持ち通じ合えた」

日本人も在籍するシルケボー室内楽団とモーツァルトの歌劇「魔笛」序曲などを合同で演奏。後半は農民楽団が牧野さん作曲の「北海道奇想曲」を単独で披露した。北海道民謡やアイヌ民謡の旋律を取り入れ、和太鼓も使った演奏に約350人の聴衆が聞き入った。

アンコールはデンマーク民謡に挑戦し、聴衆もデンマーク語で歌に加わった。元酪農家ヤコブ・ジェンセンさん(67)は「日本に農家のオーケストラがあると知って驚いた。演奏レベルも高い」。

牧野さん（後志管内余市町）は「西洋音楽の古里である欧州で演奏したいという10年来の夢がかなった。音楽で気持ちが通じ合えた」と感慨深げだった。

同楽団は牧野さんを中心に1994年に結成。道内各地の農家や農協職員、農学系の学生ら約70人が農閑期に集まり年1回の定期演奏会を開いている。

海外公演に臨んだ高橋幸治さん(右)と小田すみれさん

デンマーク公演は同国在住の高井久光・酪農学園大（江別市）特任教授らの協力で実現した。総勢59人は14日に現地の農業学校でも演奏会を行い、17日に帰国する。

■　■

農家団員で最高齢の高橋幸治さん(73)＝石狩管内当別町、バイオリン＝は演奏を終え「海外公演なんて夢のまた夢だと思っていた」と、しみじみとつぶやいた。

楽団に出会い、高校卒業以来遠ざかっていたバイオリンを再び弾き始めて17年目。さまざまな楽器の音色が一体となる瞬間は電流が走ったように体が震え、涙が出るという。「今年は欧州公演があると思うだけでわくわくした。楽団で生きがいと仲間を得た。もう音楽のない人生は考えられない」。夢の舞台を経験した高橋さんの心は、早くも次の農閑期へと向かう。

最年少の胆振管内壮瞥町・壮瞥小2年、小田すみれさん(8)も初めての海外で、身長131㌢の体に合わせた小振りのバイオリンを手に、堂々と演奏。横で弾く母の道子さん(38)も、その姿に目を細めた。5歳でバイオリンを始めたすみれさんだが、レベルが上がるにつれ「難しくて、あまり楽しくなくなった」という。初めて「壁」に直面したすみれさんに、指導する同楽団の野村聡さん(47)＝千歳市＝が昨年夏、「他の楽器と一緒に弾けば演奏のおもしろさが分かってくる」と入団を勧めた。

「少し緊張したけれど、2回しか間違えなかった。また演奏したい」。大人も緊張した海外公演で大物ぶりを発揮したすみれさん。舞台を降りるとシロクマのぬいぐるみを抱き上げ笑顔を見せた。